

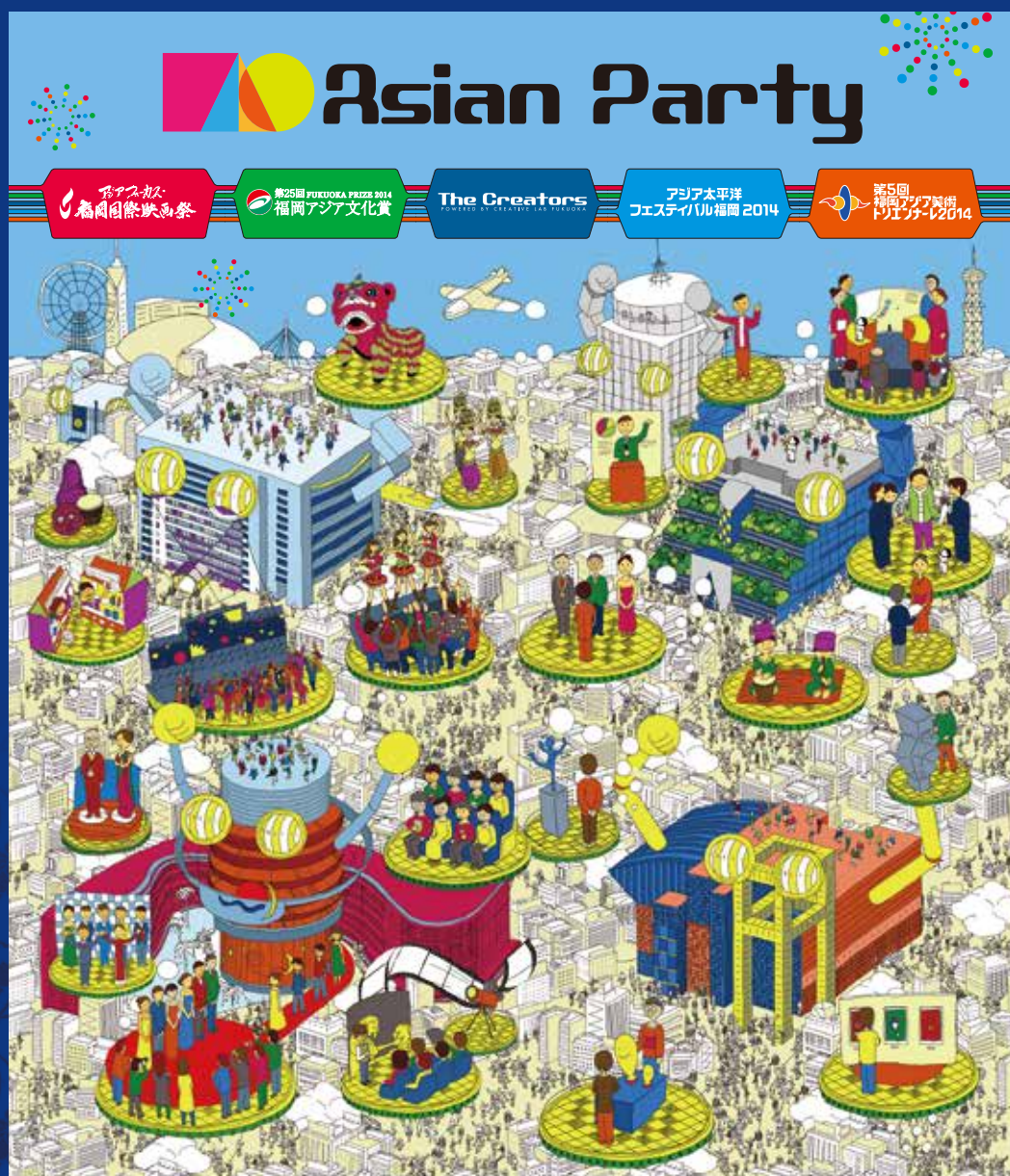


FUKUOKA PRIZE 2014

第25回

福岡アジア文化賞

アジアと創る。アジアを考える。



主催／福岡市、公益財団法人福岡よかトピア国際交流財団
 発行／福岡アジア文化賞委員会事務局
 〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 福岡市総務企画局国際部内
 TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130
 e-mail: acprize@gol.com
 ホームページ: <http://fukuoka-prize.org/>
 Facebook: <https://www.facebook.com/FukuokaPrize>



大賞
 エズラ・F・ヴォーゲル
 米国／社会学者



学術研究賞
 アジュマルディ・アズラ
 インドネシア／歴史学者



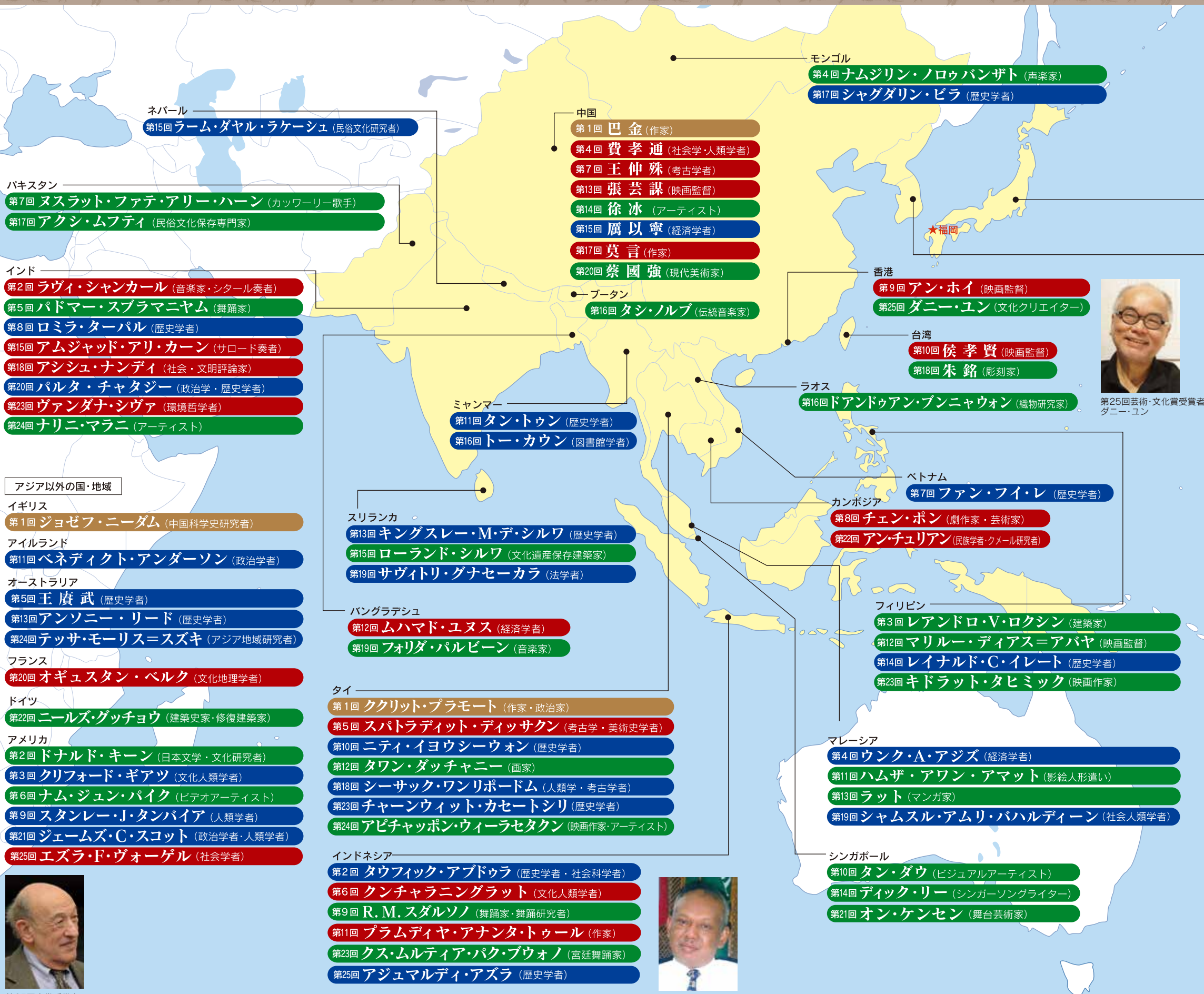
芸術・文化賞
 ダニー・ユン
 香港／文化クリエイター

報告書



福岡アジア文化賞の受賞者

■ = 創設特別賞 ■ = 大賞 ■ = 学術研究賞 ■ = 芸術・文化賞



アジア以外の国・地域

- イギリス**
 - 第1回 **ジョゼフ・ニーダム** (中国科学史研究者)
- アイルランド**
 - 第11回 **ベネディクト・アンダーソン** (政治学者)
- オーストラリア**
 - 第5回 **王 廣 武** (歴史学者)
 - 第13回 **アンソニー・リード** (歴史学者)
 - 第24回 **テッサ・モーリス＝スズキ** (アジア地域研究者)
- フランス**
 - 第20回 **オギュスタン・ベルク** (文化地理学者)
- ドイツ**
 - 第22回 **ニールズ・グッチョウ** (建築史家・修復建築家)
- アメリカ**
 - 第2回 **ドナルド・キーン** (日本文学・文化研究者)
 - 第3回 **クリフォード・ギアツ** (文化人類学者)
 - 第6回 **ナム・ジュン・パイク** (ビジュアルアーティスト)
 - 第9回 **スタンレー・J・タンバイア** (人類学者)
 - 第21回 **ジェームズ・C・スコット** (政治学者・人類学者)
 - 第25回 **エズラ・F・ヴォーゲル** (社会学者)



第25回大賞受賞者
エズラ・F・ヴォーゲル



第25回学術研究賞受賞者
アジュマルディ・アズラ



第25回芸術・文化賞受賞者
ダニー・ユン

日本

- 第1回 **黒澤 明** (映画監督)
- 第1回 **矢野 暢** (社会学者)
- 第2回 **中根 千枝** (社会人類学者)
- 第3回 **竹内 實** (中国研究者)
- 第4回 **川喜田 二郎** (民族地理学者)
- 第5回 **石井 米雄** (東南アジア研究者)
- 第6回 **辛島 昇** (歴史学者)
- 第7回 **衛藤 藩吉** (国際関係研究者)
- 第8回 **樋口 隆康** (考古学者)
- 第9回 **上田 正昭** (歴史学者)
- 第10回 **大林 太良** (民族学者)
- 第12回 **速水 佑次郎** (経済学者)
- 第14回 **外間 守善** (沖縄学者)
- 第17回 **濱下 武志** (歴史学者)
- 第20回 **三木 稔** (作曲家)
- 第21回 **毛里 和子** (現代中国研究者)
- 第24回 **中村 哲** (医師)

韓国

- 第3回 **金 元 龍** (考古学者)
- 第6回 **韓 基 彦** (教育学者)
- 第8回 **林 権 澤** (映画監督)
- 第9回 **李 基 文** (言語学者)
- 第16回 **任 東 権** (民俗学者)
- 第18回 **金 徳 洙** (伝統芸能家)
- 第21回 **黄 秉 翼** (音楽家)
- 第22回 **趙 東 一** (文学者)

CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 p01-02

福岡アジア文化賞とは p03-04

第25回受賞者

大賞 エズラ・F・ヴォーゲル p05

学術研究賞 アジュマルディ・アズラ p06

芸術・文化賞 ダニー・ユン p07

授賞式 p08~12

市民交流事業

エズラ・F・ヴォーゲル p13-14

アジュマルディ・アズラ p15-16

ダニー・ユン p17-18

国内・海外会見および広報活動、報道実績 p19-20

25周年記念、外務大臣表彰 p21-22

アジアンパーティ、文化賞関連イベント p23-24

歴代受賞者名鑑 p25~30

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福

岡アジア文化賞を創設しました。以来、25年間で99人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりにはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからは都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

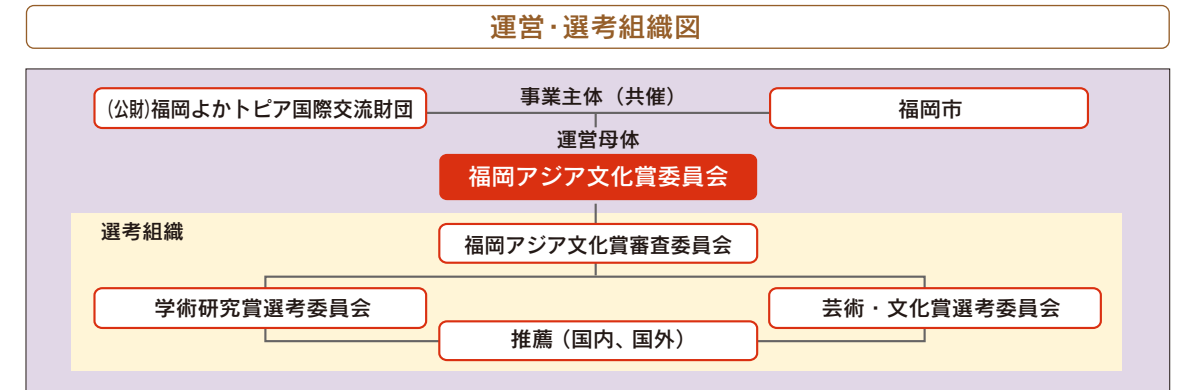
大賞	学術研究賞	芸術・文化賞
賞金 ¥5,000,000	賞金 ¥3,000,000	賞金 ¥3,000,000
アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体。	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

3. 対象圏域 東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催 福岡市、公益財団法人福岡よかとぴア国際交流財団

5. 運営・選考組織

- 福岡アジア文化賞委員会**
賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。
- 福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会**
各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞および各賞受賞候補者を選考し、さらに各賞の選考委員長などで構成される審査委員会で総合的に審査し、受賞者を決定します。
- 推薦委員**
広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関など7千人を超える関係者に、推薦を依頼しています。



第25回福岡アジア文化賞のあゆみ

2013.07	54か国・地域約7,700人に第25回受賞候補者の推薦を依頼
2014.02	学術研究賞(2日)、芸術・文化賞(3日)各選考委員会にて、推薦された29か国・地域の受賞候補者230名について選考 審査委員会(24日)にて審査
2014.04	審査・選考合同委員会(19日)
2014.05	25周年記念「歴代受賞者学校訪問」(27日)
2014.06	文化賞委員会にて3人の受賞者を承認し福岡記者会見で発表(11日)
2014.07~08	米国(ボストン)記者会見(7月1日)、香港記者会見(7月23日)、インドネシア(ジャカルタ)記者会見(8月12日)
2014.09	25周年記念「学生セミナー」に歴代受賞者招聘(8月7日) 25周年記念「歴代受賞者学校訪問」(3日) 授賞式(18日)、学校訪問(18日、19日)、市民フォーラム(17日、21日)、アジア文化サロン(19日、20日) 25周年記念展開催(10日~23日) 25周年記念本「アジアと考えるアジア」発刊(18日)
2014.12	「九州・アジアメディア会議」25周年記念シンポジウムに歴代受賞者招聘(4日)

第25回福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞	福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞
委員長 有川 節夫 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 稲葉 継雄 九州大学名誉教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員	委員長 藤原 恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員
副委員長 貞刈 厚仁 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員	副委員長 宇戸 清治 東京外国語大学大学院総合国際学研究院言語文化部門教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員
委員 稲葉 継雄 九州大学名誉教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 天兒 慧 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授	委員 石坂 健治 日本映画大学教授 東京国際映画祭アジア部門ディレクター
委員 宇戸 清治 東京外国語大学大学院総合国際学研究院言語文化部門教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長	委員 石澤 良昭 上智大学アジア人材養成 研究センター特任教授	委員 後小路 雅弘 九州大学大学院人文科学 研究院教授
委員 柄 博子 国際交流基金統括役	委員 河野 俊行 九州大学大学院法学研究院教授	委員 内野 儀 東京大学大学院総合文化 研究科教授
委員 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 末廣 昭 東京大学社会科学研究所教授	委員 川村 湊 法政大学国際文化学部教授
委員 土屋 直知 株式会社正興電機製作所 代表取締役会長	委員 竹中 千春 立教大学法学部教授	委員 小西 正捷 立教大学名誉教授
委員 藤原 恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 新田 栄治 鹿児島大学名誉教授	委員 細川 周平 国際日本文化研究センター教授



エズラ・F・ヴォーゲル

米国/社会学

Ezra F. VOGEL

社会学者（ハーバード大学ヘンリー・フォードII世社会科学名誉教授）

●主な経歴

- 1930 米国オハイオ州生まれ
- 1958 ハーバード大学博士号(社会学)
- 1958-60 日本語習得および日本の中間階級研究のため初来日
- 1967-2000 ハーバード大学教授
- 1972-77 ハーバード大学東アジア研究所(現フェアバンク中国研究センター) 所長
- 1972-90 ハーバード大学東アジア研究の学部重点課程担当理事
- 1977-80 ハーバード大学東アジア研究協議会会長
- 1980-87 ハーバード大学国際情勢センター日米関係プログラム担当代表
- 1993-95 米国国家情報会議(NIC) 東アジア担当国家情報官
- 1995-99 ハーバード大学フェアバンク東アジア研究センター(現フェアバンク中国研究センター) 所長
- 1997-99 ハーバード大学アジア・センター所長
- 2001 アジア財団東アジア政策提言タスクフォース共同ディレクター

●主な著作

- 『ジャパン・アズ・ナンバーワン』ハーバード大学出版社, 1979.[日本語翻訳版あり]
- 『中国の実験—改革下の広東』ハーバード大学出版社, 1989.[日本語翻訳版あり]
- 『現代中国の父—鄧小平』ベルクナップ・プレス, 2011.[日本語、中国語翻訳版あり]

●贈賞理由

エズラ・F・ヴォーゲル氏は、1967年以来、ハーバード大学教授として研究・教育に従事し、第二次世界大戦後のアジアのダイナミックな政治経済社会の変動を追究し、多大な成果を挙げてきた。特に高度経済成長期の日本(1960-1980年代)と、急速に台頭した中国(1980-2000年代)への深い洞察と緻密な実証研究は顕著な業績である。また、東アジアの国際関係史に関しても同地域の研究者と地道な共同研究を重ね、冷静で重みのある提言を行ってきた。氏から薫陶を受けた研究者は多く、世界の泰斗として広く尊敬されている。

ヴォーゲル氏は、1930年にオハイオ州デラウェアで生まれ、50年にオハイオ・ウェスリアン大学を卒業、58年にハーバード大学社会学関係学科で博士号(社会学)を取得した。1972年から2000年に退職するまで、同大学の東アジア研究所長、日米関係プログラム代表、フェアバンク東アジア研究センター所長を歴任し、1993年から95年には米国国家情報会議東アジア担当国家情報官を務めるなど、米国の東アジア研究、対アジア政策の重責を担ってきた。

ヴォーゲル氏は最初の代表的著作『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(1979年)において、単なる日本賛美ではなく、乏しい天然資源の中で工業化を進めてきた日本が、脱

工業化社会に向かう過程で直面する問題を世界のどの国よりも巧みに処理してきたと評価し、アメリカが学ぶべきモデルの国として日本を紹介した。欧米以外の国をモデルにするという本書の主張は、画期的なものであった。

『中国の実験—改革下の広東』(1989年)は、まさに天安門事件が起こり、中国における改革開放の推進が危ぶまれていた最中に出版された。同書は、改革の最先端にあった広東省の10年を1987年と88年の集中的な現地調査をもとに分析したもので、氏は同省の実験はやがて中国の発展モデルとなり、アジアの新興工業経済地域(NIEs)との連携を促すと予見している。2000年退職後、鄧小平の研究に力を注ぎ、膨大なインタビューや内部の資料などをもとに分析を行い、2011年に『現代中国の父—鄧小平』を出版した。中国現代史を再構築し新たな地平を切り拓いた同書は、ウォールストリート・ジャーナル、ワシントン・ポスト、英エコノミスト誌などの「ブック・オブ・ザ・イヤー」に選ばれ、世界の注目を集めた。

東アジアを理解するうえで先駆的な研究を世に示すとともに、歴史研究を踏まえ同地域における国際関係のあり方について貴重な提言を行ってきたエズラ・F・ヴォーゲル氏は、まさに「福岡アジア文化賞 大賞」にふさわしい。



アジュマルディ・アズラ

インドネシア/歴史学

Azyumardi AZRA

歴史学者(インドネシア国立イスラーム大学ジャカルタ校大学院長兼歴史学教授)

●主な経歴

- 1955 インドネシア、西スマトラ、ルプカルン生まれ
- 1982 インドネシア国立イスラーム高等学院ジャカルタ校修士号(イスラーム教育)
- 1988 米国コロンビア大学修士号(中東研究)
- 1992 米国コロンビア大学博士号(歴史学)*1990年同大学修士号(歴史学)
- 1998-2002 インドネシア国立イスラーム高等学院ジャカルタ校学長
- 2002-06 インドネシア国立イスラーム大学ジャカルタ校学長
- 2004-09 インドネシア国家研究評議会メンバー
- 2004- インドネシア統治改革パートナーシップ創設者、諮問委員
- 2005 米国モンタナ州、キャロル・カレッジ名誉博士号(人文学)
- アジア財団50周年記念賞(教育改革分野)、マハプトラ勲章
- 2007- インドネシア国立イスラーム大学ジャカルタ校大学院長兼歴史学教授
- 2008-09 世界経済フォーラム、信仰評議会メンバー
- 2010 大英帝国勲章
- 2010-12 国際アジア歴史学会会長
- 2012- 行動するイスラーム教徒のアジア・ネットワーク会長

●主な著作

- 『東南アジアにおけるイスラーム改革主義の諸起源: 17・18世紀における中東とマレー・インドネシアのウラマー(イスラーム学者)のネットワーク』(英語)、オーストラリア: アジア研究学会出版シリーズ, 2004.
- 『インドネシア、イスラーム、民主主義: グローバル・コンテクストにおけるダイナミズム』(英語)、米国: ソリステイス出版, 2006.
- 『宗教的権威の諸相: 20世紀インドネシア・イスラームにおける変化と挑戦』(共編)(英語)、シンガポール: 東南アジア研究所, 2010.

●贈賞理由

アジュマルディ・アズラ氏は、優れた歴史学者、革新的な教育者、そして中道・穏健なイスラームを説き導かれた知識人である。インドネシアにおけるイスラーム研究の発展と、調和ある市民社会の形成に尽力し、またその知的で実践的な活動は、国際社会における異文化間の相互理解にも大きく貢献している。

アズラ氏は、1955年に西スマトラ・パダン市近郊に生まれ、米国コロンビア大学に学び、中東研究で修士号、歴史学で博士号を取得した。氏は、17、18世紀の中東とマレー・インドネシア地域間のウラマー(イスラーム学者)のネットワーク(師弟関係や知的系譜)を、同時代のアラビア語の史資料に依拠して研究し、『東南アジアにおけるイスラーム改革主義の諸起源』(2004年)に結実させた。その中で19世紀以降に同地域で開花するイスラーム改革主義および新神秘主義は、その起源が定説よりもはるかに古く、地域間の交流と相互作用を通して形成されてきたことを実証的に解明した。同書は、近現代イスラーム思想史研究および文明間の思想伝播研究を深化させ、イスラーム世界における知的な東西交流の歴史の厚みを明らかにし、新たな研究展開を導いた。そのほか、氏は10冊以上の単著書と多数の編著書・論文を発表している。

アズラ氏は、イスラーム教育の刷新を目指し、1998年より国立イスラーム高等学院ジャカルタ校の校長として大幅な組織改革を行った。新たに心理、経済・経営、理工、医学・健康、社会・政治の5学部および大学院を加えて、同校を国立イスラーム大学ジャカルタ校に昇格させ、同大学の初代学長を務めた(2002-06年)。また、2010年から2012年には国際アジア歴史学会の会長を務めるなど、国際的な学術・研究機関で重要な役職を歴任している。

さらにアズラ氏は、イスラームの教えの深い理解にもとづく中道・穏健な立場から、新聞・雑誌・テレビなどのマスメディアを通して、インドネシア建国5原則(パンチャシラ)と文化的多元主義の擁護、宗教間対話の促進などを熱心に説き、調和ある社会発展のために献身している。インドネシア国家研究評議会およびインドネシア学術会議において重要な役割を果たし、2005年に国民的栄誉である「マハプトラ勲章」を受章した。

学術の国際交流と文明・宗教間の対話に積極的に取り組み、イスラーム世界と非イスラーム世界の相互理解に多大な貢献をしてきたアジュマルディ・アズラ氏は、まさに「福岡アジア文化賞 学術研究賞」にふさわしい。

第25回 福岡アジア文化賞 授賞式

■日時:9月18日(木) 18:15~20:00 ■会場:福岡シンフォニーホール(アクロス福岡)

第25回 芸術・文化賞受賞者

Arts and Culture Prize



ダニー・ユン

香港/演劇

Danny YUNG(榮念曾)

文化クリエイター(香港芸術家集団「進念・二十面體」芸術監督、香港現代文化センター主席)

●主な経歴

- 1943 中国、上海生まれ
- 1967 米国カリフォルニア大学バークレー校卒業(建築)
- 1969 米国コロンビア大学修士号(都市設計)
- 1982 香港芸術家集団「進念・二十面體」創設メンバー(1985- 芸術監督)
- 1996-98 香港科技大学芸術センター所長
- 2008 「荒山泪」でユネスコ国際演劇協会よりミュージック・シアター・ナウ賞を受賞
- 2009 ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章を受章
- 2010 中国上海国際博覧会日本館メインショー「トキ再生の物語」を佐藤信氏と共同演出
- 2011 国際研究フォーラム「能と昆劇」を企画(南京、東京、香港にて)
- 2012 「天天向上 地域と学校発展のための創造性プログラム」を発表(香港にて)「第1回トキ国際芸術祭」を企画
- 2013 上海当代芸術博物館と共催でトキプロジェクトを展開(南京、上海にて)

●主な舞台芸術作品

- 『荒山泪』香港、シンガポール、ロッテルダム、横浜、2008-09
- 『夜逃げ』香港、シンガポール、台北、上海、横浜、2010-12
- 『舞台姉妹』香港、2010-12
- 『靈戲』香港、シンガポール、東京、2011-12

●主な視覚芸術作品

- 『毒草』(インスタレーション)、中国・成都、2002
- 『木・人』(個展)、香港、2003
- 『天天向上』(作品展・ワークショップ・交流プログラム)、パリ、上海、シンガポール、台北、香港、北京、アナーバー(米国)、東京、2007-13
- 『現代中国を求めて』(個展)、香港、2011

●贈賞理由

ダニー・ユン氏(本名:榮念曾)は、演出家、劇作家、舞台美術家としてこれまで100以上の斬新な舞台作品を発表する一方、国際交流、文化政策、芸術教育の分野にも熱心に取り組み、アジアと世界、伝統と現代といった、領域や世代を越えた人と人とを繋ぐ多彩な活動で、アジアの芸術・文化の発展に大きく貢献している。

ダニー・ユン氏は1943年上海に生まれ、5歳の時に香港に移住、米国カリフォルニア大学バークレー校で建築学を学び、コロンビア大学大学院で修士号(都市設計)を取得した。1970年代後半に香港に戻り、82年に芸術家集団「進念・二十面體」の結成に参加、85年以降、同集団の芸術監督を務めている。映像等のマルチメディアを駆使しながらも、中国の伝統芸能を常に意識した氏の舞台作品では、伝統を現代に活かす道筋が探られている。『伝統を実験する』(1991年-)、『一つのテーブル、二つの椅子』(1997年-)と題された現在も継続中のシリーズは、多数の伝統芸能家と現代舞台芸術家の参加を得て、香港のみならず、東京、シンガポール、台北、上海、ベルリン、ニューヨークなど世界各地で上演された。20世紀を代表する京劇役者程硯秋^{チェンインチウ}取材して制作した演劇「荒山泪」で、ユネスコ国際演劇協会のミュージック・シアター・ナウ賞を受賞(2008年)。上海万博日本館で上演された短編舞台「トキ再生の物語」(2010年)では、中国伝統の昆劇役者集団による生の演技とデジタル映像によって、人間と自然の調

和が美しく表現されている。公演は会期中6,000回を超え、約400万人がその舞台に接した。

美術家としては、ビデオ、インスタレーション作品に加え、「天天向上」(中国語で「毎日進歩する」という意味)という名のキャラクターを題材にしたコミックやフィギュア、彫刻で知られる。ユン氏は同キャラクターを使ったワークショップを香港だけでなく欧米やアジア各地で実施し、自由な発想力の涵養が、新しい世界を創り出す原動力になることを人々に伝え続けている。

他方、香港芸術発展局の創設(1995年)に参画して以降、国際交流、文化政策、芸術教育の分野にも取り組み、自身がその創立に尽力した香港兆基創意書院(芸術高校)の理事を務めるかわら、国際フェスティバル、共同プロジェクト、国際会議への参加や国際ネットワークの構築により、芸術家に限定しない人と人とを繋ぐ活動を世界各地で展開している。このような活動の中、2009年にはドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章を授与された。その他、香港現代文化センターの主席等としても引き続き、香港を中心とした東アジアの芸術文化界に大きな影響を与えている。

このように舞台芸術と美術にとどまらない多彩な分野で大きな貢献を果たしたダニー・ユン氏は、まさに「福岡アジア文化賞 芸術・文化賞」にふさわしい。



式次第

【第1部】	開式	
	受賞者紹介	
	主催者代表挨拶	福岡市長 高島 宗一郎
	お言葉	秋篠宮殿下
	選考経過報告	福岡アジア文化賞審査委員会委員長 有川 節夫
【第2部】	贈賞	福岡市長 高島 宗一郎 (公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長 末吉 紀雄
	市民代表お祝いの言葉	
	受賞者挨拶とインタビュー	
	特別披露 「雅楽と昆劇の共演」(演出:ダニー・ユン、演奏:東儀秀樹、舞踊:徐思佳)	
	祝曲演奏 「New ASIA(ニュー・エイジア)」(演奏:東儀秀樹)	
	閉式	

第25回福岡アジア文化賞の授賞式は、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、市民をはじめ各国の来賓、各界関係者などが一堂に会して開催され、受賞者の栄誉を讃えました。

弾むような三味線の響き、色鮮やかなプロジェクションマッピングの造形美。第25回の節目を飾る授賞式は、躍動感あふれる演出で幕を開け、客席中央を歩く3人の受賞者は、盛大な拍手を浴びて登壇。高島宗一郎福岡市長が「アジアを知る」から「アジアと創る」へ進化したアジアンパーティの中で、これまでの蓄積を生かし、様々な交流を大切にしていきたい」と挨拶。続いて秋篠宮殿下よりお言葉を賜り、福岡アジア文化賞審査委員長の有川節夫九州大学総長から選考経過が報告され、いよいよ贈賞。高島市長と末吉紀雄福岡よかトピア国際交流財団理事長が、受賞者それぞれに賞状とメダルを贈呈。市民代表からお祝いの言葉が贈られ、ドレスアップした福岡インターナショナルスクールの子どもたちが花束を手渡すと、会場は大きく温かな拍手に包まれました。

第2部では3人の受賞者による喜びのスピーチに続き、市民代表の質問に答える形で「福岡への期待」「日本文化への関心」「活動のエネルギー源」などについて、受賞者がそれぞれの思いを語りました。続く雅楽と昆劇の共演では、衣冠束帯姿の東儀秀樹氏が奏でる艶やかな雅楽の音色と、昆劇女優、徐思佳氏の華麗な舞いが共鳴。さらに、東儀氏が奏でる遙かな地平まで響くような祝曲の音色が、授賞式の最後を優雅に締めくくりました。



客席を通過して登壇する受賞者



大賞のエスラ・F・ヴォーゲル氏への贈賞



受賞者に賞状とメダルを贈る末吉福岡よかトピア国際交流財団理事長(左)



「境界を越えて」をテーマとした日中のアーティストの共演ステージ



高島福岡市長による主催者代表あいさつ

有川九州大学総長による選考経過の報告



オープニングのプロジェクションマッピング



会場で行った記念本の先行販売



東儀秀樹氏による祝曲「New ASIA」の演奏

第25回 福岡アジア文化賞授賞式 秋篠宮殿下お言葉



本日、福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される3名の方々に心からお祝いを申し上げます。

また本賞が、このたび25回の節目を迎えられたことは誠に喜ばしく、これまで力を尽くしてこられた多くの関係者に深く敬意を表します。

現代社会におけるグローバル化の進展は、画一的な思考方法や生活様式をもたらした面があります。いっぽう、地域の独自性や多様性に対する人々の関心とその重要性に対する認識が高まってきていると感じることが多々あります。

このようななか、「福岡アジア文化賞」は、アジアにおける固有で多様な文化を尊重し、その保存と継承に貢献するとともに、新たな文化の創造にも寄与することを目的とした、大変意義深い賞であると言えます。本日の受賞者も歴代の受賞者同様、文化の多様性に対する理解の促進と未来の発展に示唆を与えてこられた方々です。その優れた業績は、アジアに限らず、広く世界に向けてその意義を示すとともに、社会全体でこれを共有し、次の世代へと引き継がれる人類の貴重な財産になることと思われま。

終わりに、受賞される皆様に改めて祝意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好が一層促進されていくことを祈念し、私の挨拶といたします。

祝賀会

授賞式に引き続いて各国の来賓、各界関係者など多数の参加を得て祝賀会を開催。末吉理事長が「多くの出会いを通じて新しいネットワークが創られることを願います」と開会を宣言。続いて香港経済貿易代表部サリー・ウォン氏が「東洋と西洋の文化が融合する香港は文化交流の価値を評価し、この意味からも福岡の取組みは意義深い」と挨拶して乾杯。各受賞者と同伴者を囲んでにぎやかな談笑が広がり、会場は一気に和やかなムードに。祝福を受けながら、笑顔で記念撮影したり、各界からの出席者と交流する光景があちこちで見られました。



末吉理事長による開会あいさつ



香港経済貿易代表部首席代表のあいさつ



福岡アジア美術トリエンナーレ参加作家ベマ・ツェリン氏(ブータン)のあいさつ



●大賞

エズラ・F・ヴォーゲル



日本の最前線でアジアの国々と交流拡大することが福岡の役割

本日は秋篠宮同妃両殿下、高島市長、そして福岡市のみなさん、ありがとうございます。この福岡アジア文化賞をいただくことができまして、誠に光栄に思っています。

私は50年以上、米国人がアジアをできるだけ深く理解できるようにするため、アジア研究を続けてきました。そのおかげで今回、福岡アジア文化賞を受けることができるのは、大変にうれしいことです。

福岡はアジアとの交流で特別な役割を果たしてきたことは、みなさん、ご存知の通りです。中国大陸、朝鮮半島、東南アジアとの玄関口にある福岡は、日本でも最も古い都市の一

つであり、長年にわたって宗教の交流、文化の交流、人間の交流、それから経済の交流など、あらゆる分野の交流を続けてきました。つまり、日本は福岡を通じてアジアとの交流を継続してきたのです。

私は個人的に福岡と密接な関係があると思っています。初来日の翌年の1959年、私は初めて福岡を訪ねてきましたが、その後50年以上、数年おきに何度も福岡を訪ねてきましたから、とても親しみを感じているのです。その間、私は福岡の経済の成長をはじめ、あらゆる分野のことを勉強しながら、少しずつ理解を深めてきました。

現在、日本は中国、韓国と緊張関係にあり、いろいろな問題を抱えています。それから北朝鮮や東南アジア各国も含めて、福岡はこうした国々との交流の最前線に立って密接な関係を築き、ますます交流を拡大していく役割を担っていると思います。

福岡市がアジアの国々との関係をより強く深くするために、このアジア文化賞を創設し、そして私に下さったことを心から感謝しています。

■インタビュー



質問:アジアの中で、特に日本に興味を持ったきっかけは、何でしたか。
ヴォーゲル氏:博士論文を書くため、米国とは異なる文化を持つ国として日本を研究対象に選んだからです。最初に科学的な目的で日本を勉強し、そして愛するようになりました。私の場合は恋愛結婚ではなく、いわば

お見合い結婚で、これが成功でした。
質問:これからの福岡に期待することは、どのようなことですか。
ヴォーゲル氏:アジアとの交流では、これからは中央政府がやることと、市民ができることを分けて考えることが大切です。福岡はアジアとの交流で特別なポジションにあり、福岡の市民は日本の最先端に立っていると言えます。ですから中国、韓国との草の根の交流を重ねながら、もう少し相手の体験への思いやりと同情を持ちながら理解していけば、関係は次第によくなると期待しています。

●学術研究賞

アジュマルディ・アズラ



未来世代の新しい世界のため、今、私たちの努力を結集しよう

栄誉ある福岡アジア文化賞の学術研究賞の受賞は、私にとって大変光栄なことです。また私だけではなく、私の家族や所属機関、そして祖国インドネシアにとっても光栄なことです。私は一介の学者にすぎませんが、このような素晴らしい賞を受賞できたことは、まったく想像を絶する出来事でした。

今回の贈賞理由に「優れた歴史学者、革新的な教育者、中道・穏健なイスラームを説く知識人である。インドネシアにおける多元的で調和ある市民社会の形成に尽力し、イスラーム文化の深い理解に基づく実践的な活動は国際社会においても

異文化間の相互理解に大きく貢献している」と表現していただいたことは、私の生涯を通して抱いてきた思いを、非常によく言い表していただいたと思いました。

私の目指すところは、より調和のとれた平和な世界を築くことです。そのためには人々を分離・対立させているあらゆる違いを乗り越え、すべての人がお互いに理解を深め尊重することが、その第一歩となるはずで

す。このグローバル化の時代においても緊張、紛争が続き、人類を苦しめており、先に述べた尊い努力は簡単なことではなくなりました。だからこそ、私たちはみな、調和のある平和な文明のため、一層努力するという大きな役割を果たさなければならないと考えます。

私は今を生きる私たちの努力を結集させることが、未来の世代のために新しい世界をつくることを可能にすると確信しております。そのため私たちは、ともにさらなる努力をして参りましょう。今回の授賞、ありがとうございます。

■インタビュー



質問:インドネシアとは一言で表すと、どのような国でしょうか。
アズラ氏:一言で表すのは難しいですね。インドネシアは13,000以上の島々から成り立ちます。地域性が豊富であり、数多くの宗教もあります。伝統も言語も豊富であり、1928年にできた公用語で話さないとい

に通じないのです。インドネシアに来られる方は、この文化の多様性を楽しんでほしいと思います。
質問:日本の文化について、関心のあるものがありますか。
アズラ氏:日本の徳川時代に非常に関心があります。日本の社会が伝統文化を無視しない形で、どのように近代化してきたのか。この経験に関心があるのです。近代化の過程で地方の文化がダメージを受けたトルコと比較して、大きな違いがあります。この問題はインドネシアの近代化にも共通する課題でもあるからです。

●芸術・文化賞

ダニー・ユン



世界の平和と繁栄のため創造エネルギーの解放を願う

アジアの多様な文化の振興と理解のため、福岡市は25年前、福岡アジア文化賞を創設しました。これにより世界が注目する文化的ブランドの地位を確立。世界の賞賛を受け、多くの都市の模範となっています。

現在の日中間の政治的な緊張関係を考慮すると、両国の文化部門の交流と連携は大変重要です。交流がなければ発展は不可能であり、文化交流のためのハード面とソフト面の確立が、文化の研究と発展の基盤となります。長期的な目標は、シンクタンクの創設と文化的創造力の振興であり、このためには次のようなことを推進していく方法を学ぶ、という

目的を持っていなければなりません。それは政府と市民の間の双方向連携、創造性のための独立したプラットフォーム、研究開発のためのイニシアティブと提案、さらに、世界に広げるための第一歩として、すべてのアジアを包括するという事です。

3カ月前、私は上海での世界文化フォーラムに参加しました。その焦点はソフトパワーと、文化というソフト資本であり、それをどう使って世界平和を推進するか、ということでした。このフォーラムでの嬉しいことは、ようやく中国が文化は国際交流の重要な分野であること、そして、香港が中国の最も重要なソフト資本であることを認識するようになったことです。

中国が直面する喫緊の課題は、香港の創造エネルギーを解放し、いつでも利用できるソフト資本を最大化することです。福岡と香港の間に、より密接な協力関係が構築され、世界の文化交流のモデルとなり、ソフト資本を世界の平和と繁栄のために解放していくことを私は切に望みます。

■インタビュー



質問:建築学を学ばれたそうですが、なぜ芸術に目覚められたのですか。
ユン氏:文化や芸術は、建築よりもっと大きな分野だと思います。しかし、私は建築学から多くを学びました。例えば、芸術でも基礎や構造が非常に重要であり、理想的な夢を追いかける姿勢も大切です。ですから

私は、多くのインスピレーションを建築学から得て、進んできました。
質問:旺盛な活動を展開されていますが、そのエネルギー源は何ですか。
ユン氏:きちんと食事をとることですね。そして、食事を楽しむこと。私は食べることが大好きで、昨日はおいしい食事を取り、真夜中まで目覚めていました。福岡に来て本当にうれしく思いました。こうして人生を楽しむことが主なエネルギー源だと思いますし、創造力や好奇心も重要です。私は初めて訪れた福岡で、数多くのことを学びたいと思います。

Grand Prize

第25回 大賞 受賞者

エズラ・F・ヴォーゲル Ezra F. VOGEL

●米国 / 社会学



市民フォーラム

激動の東アジア、今、そしてこれから ～エズラ・ヴォーゲル氏からの提言～

■開催日/2014年9月17日(水) 19:00～21:00
■会場/エルガーラホール8F 大ホール
■参加者/350人



<第一部 基調講演>

相手の立場を考え、衝突を避ける 柔軟い方法を考えることが重要

私は、日本と中国に多くの親しい友人がいますが、両国を研究し、私自身も体験してきた立場から、40年の日中関係の歴史をできるだけ客観的に見ていきたいと思えます。

1972年、田中角栄が訪中して日中国交正常化が実現します。しかし、正常化を急ぐあまり、あらゆる条約が未調整のままスタートし、入国手続き等の問題が未解決のままでしたので関係はそれほど進展しませんでした。それから1978年に鄧小平が来日し、新日鉄の工場や日産の自動車工場を視察。新幹線で移動して松下幸之助に会い中国でのテレビ製造について協力を依頼します。こうして日本から中国に多くの援助が行われ、日本の小説やテレビ番組が中国で紹介されるなど相互交流が進められました。

こうして80年に日本で実施されたアンケートでは、78%が中国はよい国と答えていましたが、今では9割以上がよくないと思っています。この変化の要因はいろいろあります。中国は、89年の天安門事件の対応により各国から非難されますが、日本との関係改善に

努め92年には天皇陛下の訪中が実現。しかし、91年に冷戦が終結すると対ソ連において戦略的協力関係にあった日本を重視しなくなり、さらに90年代に自信をつけてきた中国は日本の援助や戦争被害に対する意識も変わってきます。98年に江沢民が来日しましたが、日本の国民感情を理解せず、良好な関係を築くことができませんでした。また中国とアメリカの緊張関係が続いたことは、同盟国の日本にも影響しました。それから、尖閣列島の国有化、靖国神社の参拝などで日中関係は冷えこみます。

もう少し相手の立場を考え、相手国を刺激しないことで関係悪化を防ぐことができたかもしれません。なぜなら国の指導者は強さを示さなければならず、相手側の圧力に対して簡単にイエスとはいえないからです。ですから、衝突を避けるために別の柔軟い方法をよく考えることが重要です。

中国側は、尖閣諸島の周辺から船や飛行機を減らすことで緊張を緩和することができます。また、中国では第二次世界大戦の映画ばかりが放映され、日本を軍国主義だと思いつけている人が多いので、私は日本の平和への努力、国際貢献について説明しています。

日本人は、第二次世界大戦について歴史的観点からもっと勉強するべきです。また、南京事件や慰安婦問題については、様々な数字

や割り切れないこともあります。殺したことや慰安婦自体は悪かったとして認めることです。その上で戦後70年間、日本は戦争が起こらないように願い、世界平和と国際交流に本当に貢献してきたことを説明し、今でもその気持ちを持っていると外国人に誇りを持って訴えることです。

<第二部 対談>



可能なら実現させたい 3カ国対話の枠組み

「ジャパン・アズ・ナンバワン」は、近代化を歩む国が共通して抱える環境問題や核家族化の問題などを、日本がうまくクリアし、克服していくことに焦点を当てた名著だと指摘する天見慧氏が、現在の日本と中国について質問。ヴォーゲル氏は、他国と比べて低い犯罪率、高い教育水準、格差の少ない社会など、日本の良さを強調しました。また、中国の新しい指導者については、広い人脈と腐敗問題への大胆な取り組みを紹介。会場から日中戦争の可能性について質問が寄せられると、同氏も含めた中国関係の専門家がその可能性は低いと考えているとの見解を示しました。



●コーディネーター

天見 慧

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

今後の日中間の関係について、天見氏が日米中のトライアングルでの対話の枠組みを提案。これに同氏も賛同し、「米国が中国に2国間での対話グループの結成を呼びかけ、そこで環境問題や省エネ問題を取り上げ、この問題は日本が強くて詳しいから、3カ国で一緒にやろう、という具合に進めていける」という可能性を語りました。

VOICE



▼1950年代から日本、中国、アジアをずっと研究されたヴォーゲル氏ならではの、歴史の流れを大局的に捉え、示唆に富んだ講演でした。今後の日中関係を考えていくための指針を示してもらいました。(右:内田良明さん、南区)▼学生時代に「ジャパン・アズ・ナンバワン」を読みましたが、今日は世界の知性に触れられると思いいました。平和への貢献という言葉が心に残っていますが、これを世界に発信すべきですね。(左:内田美紀子さん、同)

学校訪問

■実施日/9月18日(木) 10:30～12:00
■会場/西南学院大学 西南コミュニティセンター



西南学院やRKB毎日放送と共催し開催した記念講演会には、大学生を中心に150名が参加。

ヴォーゲル氏は、講演の冒頭で自身の福岡との特別なつながりを紹介し、「初来日の翌年の1959年には、妻子と一緒に福岡を訪れて博多人形を購入し、その後も数年おきに福岡を訪れ、アジア太平洋博覧会も見学しました」と当時を回想。また、日本と中国を研究し、両国に多くの友人を持つ立場から、日中関係の好転を願って力を注いでいきたいと抱負を語りました。

続いて、福岡は日本でもアジアと最も密接な関係にあり、奈良時代からアジア各国と往来し、2,000年もの平和的な交流の歴史を持つ、と解説。あわせて、元寇や秀吉の時代、日清戦争や第二次世界大戦など、困難な時代があったことを認めるべきだと提案しました。

その後、過去40年間の日中関係を振り返りながら、日中国交回復の流れから鄧小平の来日、両国の経済・文化交流の歴史について様々なエピソードを交えて紹介。

現在の日中関係については、両国がお互いに心遣いをもう少し持つことができればここまで関係が悪化することはなかったとの見解を示しました。

また、中国や韓国の若者が戦争や歴史について話しても、日本の若者は戦争や歴史についてあまりよく知らないということがあるとの事例を紹介し、国と国が良い関係を構築するには歴史を学ぶことが重要だと提案しました。

会場から、中国が進めている途上国との経済関係強化への影響についての質問には、「中国は現地の習慣や相互の信頼に配慮しないなど、国際的な資本の使い方を勉強していない面があり、途上国からの反発を招く場合が見られる。私はここ数年で中国も低成長になると予想している」と答えました。

講演終了後には、西南学院大学の学生1人にヴォーゲル氏の著作『現代中国の父 鄧小平』が贈られました。



第25回 学術研究賞 受賞者

アジユマルディ・アズラ Azyumardi AZRA

●インドネシア / 歴史学



市民フォーラム

民主化し発展するインドネシア ～日本・欧米・イスラーム世界を結ぶ絆～

■開催日/2014年9月21日(日) 17:00～19:00
 ■会場/アクロス福岡地下2階 イベントホール
 ■参加者/150人



<第一部 基調講演>

建国5原則で穏やかな社会実現 新政権発足で進む両国の緊密化

インドネシアは多文化主義の国で様々な異なる伝統を持っている国であり、多くの宗教を持つ国でもあります。全人口2億4千500万人の88.7%、2億人以上がイスラーム教徒ですが、イスラーム国家ではありませんし、国教を定めてはいません。我が国ではパンチャシラ、つまり建国5原則が拠りどころです。①唯一神への信仰②インドネシアの統一③人道主義④民主主義⑤国民への社会正義。これが国の重要な基盤であり、宗教的にも友好的な原則です。我が国のイスラーム教は穏健さを重要視し、平和的で土着の文化を包容し、寛容性もあって他宗教との共存も堅持しています。

我が国には市民社会をベースとした大きなイスラーム組織があります。最大の組織ナフダトゥル・ウラマーは頭文字からNUと呼ばれ、会員4千万人に達しています。もう1つの組織がムハマディアで、幼稚園から大学まで13,000もの学校を持っています。このようなイスラーム組織は他の国にはみられないもので、これが我が国の穏健さにつながっており、国と草の根の人々との仲介や、社会的な融

和を保つ役割も果たしています。我が国はこの組織をベースに安定した社会を実現しており、非常に恵まれていると思います。

今年7月に大統領選挙があり、誰かが殺されることもなく平和的に行われ、前ジャカルタ州知事のジョコウィ氏が選出されました。我が国は日本と同じ民主主義国家であり、相互に経済的な利害関係も持っていますが、新政権の誕生によって両国の関係はさらに緊密になり、強化されることでしょう。我が国は現在、年率5～6%の経済成長を継続し、さらに伸びると予想され、中間層も急増しています。新政権は電気や発電、交通網などのインフラ開発を進め、汚職やマフィアの根絶に積極的に取り組んでいくでしょう。

日本とインドネシアは中東沿岸諸国から原油を輸入しており、中東のイスラームの国から信頼され、敬意を払われています。また我が国はこうした中東諸国に影響を持っています。両国はどちらも中東エリアに地政学的な利害関係を持っていません。したがって両国が仲介することで、中東地域に平和をもたらす試みを進めることができるかもしれません。東京で開催する平和会議に、両国が中東諸国に参加を呼びかければ、その要請を受けるのではないのでしょうか。平和の構築という素晴らしい仕事について、インドネシアと日本が協力していくことができれば、大変うれしいことと思います。

<第二部 パネルディスカッション>



●コーディネーター

清水 展

京都大学東南アジア研究所
教授



●パネリスト

中村 光男

千葉大学名誉教授



●パネリスト

大形 里美

九州国際大学
国際関係学部教授

努力が報われる、安定した社会の証

インドネシア研究40年という大ベテランの中村光男氏が、研究者・歴史学者、教育者、公共的知識人という3つの観点から、アズラ氏の業績を紹介。民主化し発展するインドネシアそのものを体現し、イスラーム世界と日本、欧米を結ぶ人物だと結論づけました。イスラーム研究の必読書とされる著作については、アラビア語で書かれたイスラーム学者の伝記を資料に、17・18世紀の中東からインドネシアに及ぶ広大なエリアが緊密に連携し、独自のイスラーム文化圏を形成していた事実を示したと紹介。そしてアズラ氏がインドネシア国立イスラーム大学に医学部等を新設し、総合大学に昇格させ、その際、日本政府から30億円の借款を実現したことを指摘しました。

これを受けて清水展氏は「苦学してここまでの地位を築かれたアズラ氏ご自身の努力と運もありますが、努力すれば報われるという事実が、インドネシアの安定した社会の証」と強調します。インドネシアの女性と企業を研究する大形里美氏は、スカーフ着用観点から女性の意識変化を追跡。最近ではイスラーム法を重視する傾向が強まっているとのインドネシア社会の分析を示しました。

会場からのなぜインドネシアでは対立が生じないのか、という質問にアズラ氏は「我が国のイスラーム教は非常に包容的、寛容的、平和的だからです」と答えました。

VOICE



▼今年、10日間ほどインドネシアのバリへ旅行しましたが、貧しい面もそれなりに目撃しました。しかし、今日の講演でインドネシア社会の現状やこれからの課題などが、とてもよく分かりました。(左:永江真夫さん、城南区) ▼数多くの島がありながら、国として1つにまとまっている理由が理解できました。ファッションとしてのスカーフ着用ならいいけど、イスラーム意識が強くなるのは少しだけ心配になりますね。(右:永江賢子さん、同)

学校訪問

■実施日/9月19日(金) 15:10～16:00
 ■会場/福岡県立福岡中央高等学校 講堂



アズラ氏は冒頭、ヨーロッパとアメリカの地図に、それぞれインドネシアの地図を重ねて東西の幅を比較し、インドネシア国内の東西の移動は飛行機で数時間かかると説明。そして人口や宗教、言語や歴史、建国5原則や教育制度などを詳しく紹介します。「我が国の特長は多文化主義ですが、『多』とはそれぞれの異なる文化、習慣を尊重し、認め合うということ。また他のイスラーム諸国に比べて、我が国の女性には、多くの自由が与えられています」と強調しました。

インドネシアで人気の食べ物は、という質問にアズラ氏は、スマトラ島のパダンではなぜか「ほかほか弁当」の人气が高いと答え、ジャカルタをはじめ、多くの都市で和食が人気だと説明しました。日本では宗教に関心を持たない人が多いことについて、どう思いますか、という質問には「インドネシアでは若者でも宗教への関心が高く、モスクや教会、寺院などの祈りの場に通い、宗教を実践している」と静かに語りました。

テレビやインターネットではわからない宗教観や生活習慣の違いに、生徒の興味は尽きなかったようです。

アジア文化サロン

■実施日/9月19日(金) 16:30～17:30
 ■会場/福岡アジアビジネスセンター 交流スペース



福岡で貿易に関するビジネスを手掛ける人々を対象に、文化サロンを開催。アズラ氏はインドネシアの地理や宗教を紹介した後、「我が国の最大の特徴は人口の多さであり、世界第3位の民主主義国家であること」とし、4月の議会選挙も7月の大統領選挙も、何の抗争もなく平和的に行われ、選挙結果についても裁判所を通じて解決した、と現状を解説します。

新しく選出されたジョコウィ大統領は、都市高速鉄道システムの建設を決断。日本とインドネシアの企業がコンソーシアムを設立して建設中であり、新政権はインフラ整備を優先し、行政手続きの簡素化を進め、さらなる経済成長を目指す方針であると分析。新政権はどのような産業政策なのか、という質問には「水産関係の部門を強化し、高速道路だけではなく海上交通の整備を推進していくでしょう。経済援助の効果もあって、日本への信頼性は格段に向上。日本から我が国への投資には、何の問題もありません」と強調しました。

第25回 芸術・文化賞 受賞者

ダニー・ユン Danny YUNG (榮念曾)

●香港 / 文化クリエイター



市民フォーラム

あらゆる境界を超えて、人と人を繋ぐ ～ダニー・ユン氏の試み～

■開催日 / 2014年9月21日(日) 13:00～15:00
 ■会場 / アクロス福岡地下2階 イベントホール
 ■参加者 / 200人



財政政策などが、アートにどのような影響を与えるのか、重要な問題ですね。トキのような鳥は絶滅してしまうのか、保護するのか、観賞用に取っておくのか。それは私たちアーティストも同じであり、劇場の外へ出たとき、自分たちは本当に強くあり続けられるのかと問い続けることで、私はアーティストたちをエンパワーし、力を付けさせよう

と考えていたのです。私たちは経済的、政治的にどのような影響を受けているのか。これを理解していくことが、長期的な文化の発展の中では重要です。私たちが中国で常に直面しているのが政治的な干渉ですが、最近では文化コミュニティの中で様々な議論が交わされています。政治的な干渉によって、アートがプロパガンダに使われてしまうことがあり、教育の中に取り込まれている場合もあるのです。

昆劇の演技を見るたびに、毎回違うところを発見します。なぜなら、人が伝統を受け継ぎ、体現しているからであり、人が無形文化遺産なのです。人は、博物館や美術館にモノとして飾られているわけではありません。いろいろな経験をして、多くのことを学ぶ機会があります。このような文化交流のためのプラットフォーム、つまり土台が重要であり、それを築くことで、お互いが相手の文化をよりよく理解でき、お互いの将来を考えることができるのです。



昆劇俳優による実演披露

< 第二部 パネルディスカッション >



●コーディネーター
内野 儀
 東京大学大学院総合文化研究科教授



●パネリスト
佐藤 信
 座・高円寺 芸術監督

芸術の役割は、新ビジョンを示すこと

内野儀氏が講演への補足解説と佐藤信氏の略歴を紹介。続いて佐藤氏は福岡アジア文化賞の役割について「芸術交流の面において都市間の交流が、今後はもっと大きな意味を持ち、非常に実り豊かなものになる」と位置づけ、これから花開いていく時代を迎えていくと解説します。そして「経済は今日の社会を相手にし、政治は明日の世界に関心を向けるが、文化芸術は常にあさつてを問題にする。東西の対立が終わって世界の構造が変わる中で、人類はまだ次のビジョンを共有できていない。あさつてを見つめて新ビジョンを示すことが、芸術の大きな役割。この意味でもユン氏の芸術は社会に何ができるのか、社会は芸術に何を返すかという問いかけは、非常に大きなテーマだ」と論を展開しました。

その後、ユン氏の演出作品『スピリッツ・プレイ』の映像を上映。「昆劇と能の役者がこの作品について考えを共有し、舞台の場、墓地の場、天安門広場の場などについて語り合った」と説明します。なぜ劇である必要があるのか、という会場からの質問にユン氏は「舞台の特徴はリアルスペースであり、時間も空間も観客と共有する。映画とは違って至近距離でのインスタラクション(相互作用)が起きる。ステージ上での自由があれば様々な経験ができ、多くを学ぶことができる」と語りかけました。

VOICE



▼大学の授業の一環で、このフォーラムに参加。ゼミの卒論で京劇を取り上げ日本人と中国人の恋愛観の違いを考察するつもりですが、今日の内容が役立ちそうなので、参加してよかったと思っています。(右:江口茜さん、城南区) ▼国と国ではなく、人と人のつながりを大切にいくことで、国境を越えた交流が大きな意味を持つ、という言葉が印象的でした。いろんなつながり方があることも実感しました。(左:川口安澄さん、早良区)

学校訪問

■実施日 / 9月19日(金) 14:10～15:35
 ■会場 / 福岡市立長尾中学校 体育館



約50名の生徒が、事前に真っ白なユン氏のキャラクター『天々向上』に自らの思いや創造を託してデコレートした個性的な作品を制作し、ユン氏の訪問を待っていました。そして、当日。生徒が持つカラーアーチの中を、ユン氏一行がにこやかに入場。ユン氏は「今回、初めて福岡に来て、みなさんに会えて非常に嬉しい」と挨拶。自分の成長過程について、「行儀が悪くてよくない子どもだったが、絵を描くことがとても好きだった。壁やテーブル、教科書などにいっぱい絵を描いたが、母親が自分の絵を好きになって励ましてくれた。」と微笑みながら話しました。そして、生徒が創った『天々向上』作品やイラスト、漫画などをスクリーンに投影しながら、生徒との交流を楽しく展開。「ユンさんにとって、天々とはどんな存在ですか」という質問には「私は好奇心が大切だと思っていて、小さなときには何だろうと上を見るが、大きくなると下を向いてしまう。だから、小さなときの気持ちを忘れないことが重要」と答え、生徒と指差しポーズを真似て楽しんでいました。

アジア文化サロン

■実施日 / 9月20日(土) 14:00～16:30
 ■会場 / 九州大学大橋キャンパス3号館 321教室



福岡市文化芸術振興財団と九州大学との連携による舞台芸術に関する人材育成プログラムとして実施。冒頭、司会の佐々木達也氏から「進念・二十面體(ズニ・アイコサヘドロン)」とは何か、という質問。ユン氏は「若者たちが設立した実験的な舞台を行う芸術集団」と答え、ネーミングの由来を紹介。1989年の天安門事件と香港で最大規模のデモ行進、97年の香港の中国への返還など、数多くを経験してきた芸術集団は、今や確固たる地位を築き、香港政府の政策に常に監視の目を光らせている存在である、と説明します。続いてユン氏の舞台作品『トライアル』『スピリッツ・プレイ』などを解説を交えて上映。昆劇俳優の徐思佳氏によるゆったりとした歌声を響かせながら身体で微妙な感情を表現するパフォーマンスに参加者は魅了されていました。参加者からの「今、最も重要な社会的テーマは何か」との質問には「表現の自由を維持するため、組織や制度に働きかけていくこと」と応じました。

国内・海外会見および広報活動、報道実績

受賞者発表記者会見

6月11日に福岡市で記者会見を開催し、受賞者の発表と25周年記念事業の紹介を行いました。冒頭高島市長より、「福岡アジア文化賞25年の軌跡」と題したプレゼンテーションが行われた後、末吉福岡よかトピア国際交流財団理事長より3名の受賞者が発表されました。続いて有川九州大学総長より、選考経過と贈賞理由の説明があり、天児選考委員と藤原選考委員長から各受賞者の業績や魅力について、映像等を使って分かりやすく解説が行われました。

【受賞者発表記者会見】

- 日 時:平成26年6月11日(水) 14:30~15:15
- 会 場:ホテルニューオータニ博多(福岡市)
- 出席者:高島 宗一郎 福岡市長(文化賞委員会名誉会長)
- 末吉 紀雄 (公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長(文化賞委員会会長)
- 有川 節夫 九州大学総長(審査委員長)
- 天児 慧 早稲田大学大学院教授(学術研究賞選考委員)
- 藤原 恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授(芸術・文化賞選考委員長)



広報活動

今年は、福岡アジア文化賞をはじめ、アジアフォーカス・福岡国際映画祭、アジア太平洋フェスティバル、The Creators、福岡アジア美術トリエンナーレといったアジアンパーティの主要事業が一体となって広報を展開しました。キービジュアルの統一や、テレビ番組出演など多彩なプロモーションを実施。この他、福岡アジア文化賞単独でのチラシ配布や、facebook等で受賞者やイベントの最新情報を配信しました。さらに、ホームページには25周年の特集サイトを開設。記念事業の紹介や歴代受賞者のメッセージを「KOTODAMA」として発信しました。



報道実績

【報道件数】
国内:234件 国外:59件 計 293件 (2014年12月現在)



海外記者会見

6月の受賞者発表を受け、それぞれの受賞者の出身国・地域で受賞決定の記者会見を開催し、現地政府機関や日本国大使館をはじめ、歴代の受賞者や現地メディアなど多くの参加をいただきました。海外記者会見では、福岡アジア文化賞の意義や受賞者の功績とともに福岡市の紹介を行い、その模様が各地で報道されました。

受賞者/エズラ・F・ヴォーゲル氏

Ezra F. VOGEL

- 開催地/米国(ボストン)
- 開催日/7月1日(火)
- 場所/アルゴンキンクラブ
- 参加者数/35人

[主な来賓・出席者]

- ピーター・グリーンリ氏(ボストン日本協会特別顧問)
- 渡邊信之氏(在ボストン日本国総領事館首席領事)

学術都市、ボストンで開催された伝達式には、ハーバード大学からアジア研究者等が参加。ヴォーゲル氏は福岡がアジアで果たす役割への期待にも触れ、スピーチしました。また、在ボストン総領事館が12月に開催した天皇誕生日のレセプションでは、賞と福岡市のブースを設置しPRを行いました。



受賞者/アジマルディ・アズラ氏

Azyumardi AZRA

- 開催地/インドネシア(ジャカルタ)
- 開催日/8月12日(火)
- 場所/ブルマンジャカルタインドネシア
- 参加者数/40人

[主な来賓・出席者]

- タウフィック・アブドゥラ氏(第2回学術研究賞受賞者)
- 進藤雄介氏(在インドネシア日本国大使館次席公使)

第2回学術研究賞受賞者のタウフィック・アブドゥラ氏が駆けつけ、お祝いの言葉をいただきました。受賞スピーチでアズラ氏は、これまで支えてくれた家族や大学関係者に感謝の述べるとともに、日本とインドネシアの関係について語りました。



受賞者/ダニー・ユン氏

Danny YUNG (榮念曾)

- 開催地/香港
- 開催日/7月23日(水)
- 場所/香港文化センター
- 参加者数/100人

[主な来賓・出席者]

- ジョン・ツァン氏(香港特別行政区政府財政司司长)
- 野田仁氏(在香港日本国総領事(大使))
- アン・ホイ氏(第19回大賞受賞者)

テレビ局、新聞社など20社以上の地元メディアや関係者が集まる中、ユン氏は、福岡アジア文化賞のような世界平和に向けた文化交流施策の重要性を笑顔でわかりやすく語りかけていました。



福岡アジア文化賞25周年記念事業

記念本『アジアと考えるアジア』発刊

賞の創設から25年、これまでの歴史を振り返るとともに、歴代受賞者へのインタビューを通して、アジアの今、そして未来へのメッセージを紡ぐ本を発行しました。約100人にのぼる歴代受賞者の経歴、受賞スピーチを掲載するとともに、6人の受賞者へのロングインタビューが収録されています。

■加藤 暁子 取材・文
■福岡アジア文化賞委員会事務局 編



歴代受賞者による「学生セミナー」

■平成26年8月7日(木)
■アクロス福岡1階 円形ホール

第24回大賞受賞者である中村哲氏をお招きし、第一部は中村氏の基調講演、第二部では参加した学生による自身の体験を通して得た国際協力について発表やディスカッションが行われました。終了後も中村氏を囲んでのアフタートークが行われ、中村氏と学生は肩を寄せて集まり、各々が抱える疑問や悩みについて語り合いました。



歴代受賞者による学校訪問

■平成26年5月27日(火) 福岡市立福岡西陵高等学校
■平成26年9月3日(水) 福岡教育大学附属久留米中学校

第24回大賞受賞者中村哲氏による学校訪問を実施。基調講演後の質疑応答では、中村氏が進んで来られた道のりの節々で、どのようなことを感じ、思ったのかなど、生徒から多くの質問が寄せられました。



福岡教育大学附属久留米中学校

市立福岡西陵高等学校

25周年記念展

■平成26年9月10日(水)～23日(火)
福岡市役所1階多目的スペース
■平成26年9月17日(水)、18日(木)
アクロス福岡1階アトリウム

福岡アジア文化賞25周年を記念した展示会を福岡市役所とアクロス福岡で開催。福岡市役所会場では、第1回から25回まで99名の受賞者や関連行事の紹介パネル、関連書籍とともに、黒澤明監督の映画「乱」の版画集や張芸謀監督、侯孝賢監督の作品台本、ドナルド・キーン氏の直筆原稿、ハムザ・アワン・アマット氏の影絵芝居人形、ラヴィ・シャンカール氏のサイン入りLPレコードなど受賞者ゆかりの貴重な品々を展示しました。また、記念展と合わせて、第25回芸術・文化賞受賞者ダニー・ユン氏の作品「天天向上」の人形やパネル等も展示し、ユン氏本人も来場しました。



九州・アジアメディア会議で歴代受賞者講演

■平成26年12月4日(木) 電気ビル共創館 みらいホール

九州とアジアのジャーナリストが一堂に会し都市問題について話し合う九州・アジアメディア会議。今年は、福岡アジア文化賞25周年を記念して「都市における芸術・文化の役割」をテーマとしたシンポジウムを開催。第21回芸術・文化賞受賞者オン・ケンセン氏をお招きし、基調講演とその後の意見交換に参加していただきました。基調講演でケンセン氏は自身が総監督を



務めるシンガポール国際芸術祭(SIFA)について、「SIFA開催の真の目的は量や数値上の競争ではなく、観客一人ひとりの経験の質であり、個人のよりよい生活創造である」と訴え、



開催の様様や参加した観客のコメントを映像で紹介しました。

TOPIC

福岡アジア文化賞 外務大臣表彰を受賞

■平成26年8月4日(月) 表彰式(外務省飯倉公館)

四半世紀の節目を迎える本年、これまでの「日本とアジア地域との相互理解促進に対する貢献」が認められ、福岡アジア文化賞委員会が外務大臣表彰を受賞しました。外務省飯倉公館にて行われた表彰式には、中國福岡市副市長が参列し、岸田外務大臣より表彰状が授与されました。



アジアンパーティ、文化賞関連イベント

アジアンパーティ (Asian Party)

1990年に始まったアジアマンスは、当時、まだ近くて遠いアジアを“知る”ためのイベントとして重要な役割を果たしてきましたが、アジアがとて身近になった現在、“アジアと創る”をコンセプトに昨年から「アジアンパーティ」に生まれ変わりました。

アジアンパーティは、“アジアのヒト、モノ、情報が集う社交場”をイメージしています。今年も、歴史ある「福岡アジア文化賞」、「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「アジア太平洋フェスティバル」に、昨年から開催のクリエイティブなイベント「The Creators」や、3年に1回開催の「福岡アジア美術トリエンナーレ」を加え、9月から11月にかけて開催されました。



アジアフォーカス・福岡国際映画祭

■平成26年9月12日(金)～21日(日)
■キャナルシティ博多(ユナイテッドシネマ・キャナルシティ13)



The Creators

■平成26年10月10日(金)
■福岡市役所西側ふれあい広場



アジア太平洋フェスティバル2014

■平成26年10月11日(土)～13日(月・祝)
■福岡市役所西側ふれあい広場/JR博多駅 博多口駅前広場



第5回福岡アジア美術トリエンナーレ2014

■平成26年9月6日(土)～11月30日(日)
■アジア美術館その他周辺地域



協力企画

福岡ユネスコ・アジア文化講演会

■平成26年11月24日(月・振替休日)
■福岡市総合図書館映像ホール「シネラ」

「福岡ユネスコ・アジア文化講演会」(主催:一般財団法人福岡ユネスコ協会、福岡市教育委員会、映像ホール・シネラ実行委員会、協力:福岡アジア文化賞委員会)は、昨年より福岡アジア文化賞受賞者を講師にお招きし開催しています。昨年のドナルド・キーン氏に続き、今年の講師は、韓国映画の至宝、林権澤(イム・グォンテク)監督(第8回(1997年)芸術・文化賞受賞者)。

講演では、監督になるまでの生活や韓国の伝統芸能「パンソリ」に魅了されて映画を撮りたいと思うようになったエピソードなどを話されました。続く石坂健治氏(日本映画大学教授、福岡アジア文化賞選考委員)とのトークショーでは、自身の作品の特徴や演出上の苦労について、また韓国映画の現状について話されました。最後に「春香伝」の上映が行われ、上映後会場は拍手に包まれました。



福岡アジア文化賞委員会委員

平成27年1月現在

特別顧問	青柳 正規	文化庁長官
〃	新美 潤	外務省国際文化交流審議官
〃	小川 洋	福岡県知事
名誉会長	高島 宗一郎	福岡市長
会長	末吉 紀雄	(公財)福岡よかトピア国際交流財団理事長
副会長	久保 千春	九州大学総長
〃	森 英鷹	福岡市議会議長
〃	貞 刈 厚仁	福岡市副市長
監事	本田 正寛	福岡市社会福祉協議会会長
〃	清原 英明	福岡市会計管理者
委員	飯盛 利康	福岡市議会第1委員会委員長
〃	浦田 喜久子	日本赤十字九州国際看護大学学長
〃	衛藤 卓也	福岡大学学長
〃	海老井 悦子	福岡県副知事
〃	大石 修二	福岡市議会副議長
〃	唐池 恒二	九州旅客鉄道株式会社代表取締役会長
〃	川崎 隆生	西日本新聞社代表取締役社長
〃	岸本 卓也	毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長
〃	岸本 吉生	九州経済産業局長
〃	佐藤 靖典	福岡市レクリエーション協会副会長
〃	柴戸 隆成	株式会社福岡銀行取締役頭取
〃	新藤 恒男	株式会社西日本シティ銀行顧問
〃	杉山 美邦	読売新聞西部本社代表取締役社長
〃	田口 五朗	日本放送協会福岡放送局長
〃	竹島 和幸	西日本鉄道株式会社代表取締役会長
〃	竹田 浩三	九州運輸局長
〃	多田 昭重	福岡文化連盟理事長
〃	田中文成	日本経済新聞社専務執行役員西部支社代表
〃	田中 優次	西部ガス株式会社代表取締役会長
〃	鎮西 正直	九州電力株式会社代表取締役副社長
〃	藤 永 憲一	株式会社九電工代表取締役会長
〃	町田 智子	朝日新聞社取締役西部本社代表
〃	八尾坂 修	福岡市教育委員会委員長
〃	山本 盤男	九州産業大学学長
〃	K.J. シャフナー	西南学院大学学長

(委員名は50音順、敬称略)



福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor

1990 - 2013

第1回 1990

創設特別賞



巴 金
BA Jin
(中国/作家) ●
『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。

創設特別賞



黒澤 明
KUROSAWA Akira
(日本/映画監督) ●
『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。

創設特別賞



ジョゼフ・ニーダム
Joseph NEEDHAM
(英国/中国科学史研究者) ●
中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。

創設特別賞



ククリット・プラモート
Kukrit PRAMOJ
(タイ/作家・政治家) ●
大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をものした文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。

創設特別賞



矢野 暢
YANO Toru
(日本/社会学者) ●
日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回 1991

大賞

ラヴィ・シャンカール
Ravi SHANKAR
(インド/音楽家・シタール奏者) ●



豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。

学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ
Taufik ABDULLAH
(インドネシア/歴史学者・社会学者)



東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。

学術研究賞

中根 千枝
NAKANE Chie
(日本/社会人類学者)



アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。

芸術・文化賞

ドナルド・キーン
Donald KEENE
(米国/日本文学・文化研究者)



大著『日本文学史』をはじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回 1992

大賞

金元 龍
KIM Won-yong
(韓国/考古学者) ●



東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。

学術研究賞

クリフォード・ギアツ
Clifford GEERTZ
(米国/文化人類学者)



インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。

学術研究賞

竹内 實
TAKEUCHI Minoru
(日本/中国研究者)



社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン
Leandro V. LOCSIN
(フィリピン/建築家) ●



東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

第4回 1993

大賞

費孝通
FEI Xiaotong
(中国/社会学・人類学者) ●



中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。

学術研究賞

ウンク・A・アジズ
Ungku A. AZIZ
(マレーシア/経済学者)



マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。

学術研究賞

川喜田 二郎
KAWAKITA Jiro
(日本/民族地理学者)



ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。

芸術・文化賞

ナムジリン・ノロバンザト
NAMJILYN Norovbanzad
(モンゴル/声楽家)



モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回 1994

大賞

スパトラディット・ディッサクン
M. C. Subhadradis DISKUL
(タイ/考古学・美術史学者)



タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界的地位づけに果たした功績は偉大。

学術研究賞

王 廣 武
WANG Gungwu
(オーストラリア/歴史学者)



華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。

学術研究賞

石井 米雄
ISHII Yoneo
(日本/東南アジア研究者)



タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。

芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム
Padma SUBRAHMANYAM
(インド/舞踊家)



インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践、創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第10回 1999

大賞

侯 孝 賢
HOU Hsiao Hsien
(台湾/映画監督)



厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。

学術研究賞

大林 太良
OBAYASHI Taryo
(日本/民族学者)



日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究の泰斗。

学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG
(タイ/歴史学者)



斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。

芸術・文化賞

タン・ダウ
TANG Da Wu
(シンガポール/ヴィジュアルアーティスト)



独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。

第6回 1995

大賞

クンチャラニングラット
KOENTJARANINGRAT
(インドネシア/文化人類学者)



インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。

学術研究賞

韓 基 彦
HAHN Ki-un
(韓国/教育学者)



独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。

学術研究賞

辛島 昇
KARASHIMA Noboru
(日本/歴史学者)



刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。

芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク
Nam June PAIK
(米国/ビデオ・アーティスト)



テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第11回 2000

大賞

プラムディヤ・アナタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER
(インドネシア/作家)



『人間の大地』は、はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問いつけた作家。

学術研究賞

タン・トゥン
Than Tun
(ミャンマー/歴史学者)



厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。

学術研究賞

ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON
(アイルランド/政治学者)



世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。

芸術・文化賞

ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat
(マレーシア/影絵人形遣い)



マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。

第7回 1996

大賞

王 仲 殊
WANG Zhongshu
(中国/考古学者)



古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。

学術研究賞

ファン・フイ・レ
PHAN Huy Le
(ベトナム/歴史学者)



イデオロギーにとられない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。

学術研究賞

衛藤 藩吉
ETO Shinkichi
(日本/国際関係研究者)



中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。

芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・カーン
Nusrat Fateh Ali KHAN
(パキスタン/カウワーリー歌手)



イスラム宗教歌謡カウワーリーにおいて並ぶ者はいない、パキスタンの国民的歌手。

第12回 2001

大賞

ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS
(バングラデシュ/経済学者)



『グラミン銀行』を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。

学術研究賞

速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro
(日本/経済学者)



市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ『速水開発経済学』とも称される学問体系を構築した。

芸術・文化賞

タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE
(タイ/画家)



タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。

芸術・文化賞

マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA
(フィリピン/映画監督)



民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第8回 1997

大賞

チェン・ボン
CHHENG Phon
(カンボジア/劇作家・芸術家)



内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。

学術研究賞

ロミラ・ターパル
Romila THAPAR
(インド/歴史学者)



独立以後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。

学術研究賞

樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu
(日本/考古学者)



フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。

芸術・文化賞

林 権 澤
IM Kwon-taek
(韓国/映画監督)



韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。

第13回 2002

大賞

張 芸 謀
ZHANG Yimou
(中国/映画監督)



現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。

学術研究賞

キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA
(スリランカ/歴史学者)



スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学に多大な貢献をした歴史学者。

学術研究賞

アンソニー・リード
Anthony REID
(オーストラリア/歴史学者)



『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。

芸術・文化賞

ラット
Lat
(マレーシア/マンガ家)



マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第9回 1998

大賞

李 基 文
LEE Ki-Moon
(韓国/言語学者)



韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。

学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH
(米国/人類学者)



タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。

学術研究賞

上田 正昭
UEDA Masaaki
(日本/歴史学者)



日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。

芸術・文化賞

R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono
(インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)



芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績を上げたインドネシアの代表的舞踊家。

第14回 2003

大賞

外間 守善
HOKAMA Shuzen
(日本/沖縄学者)



「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。

学術研究賞

レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO
(フィリピン/歴史学者)



東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。

芸術・文化賞

徐 冰
XU Bing
(中国/アーティスト)



独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。

芸術・文化賞

ディック・リー
Dick LEE
(シンガポール/シンガーソングライター)



シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第15回 2004

大賞

アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN
(インド/サロード奏者)



インド古典弦楽器「サロード」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超える」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。

学術研究賞

厲以寧
LI Yining
(中国/経済学者)



中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。

学術研究賞

ラーム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH
(ネパール/民俗文化研究者)



ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。

芸術・文化賞

ローランド・シルヴァ
Roland SILVA
(スリランカ/文化遺産保存建築家)



イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第20回 2009

大賞

オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE
(フランス/文化地理学者)



欧日の人間社会と空間・景観・自然に対しての哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。

学術研究賞

パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE
(インド/政治学・歴史学者)



正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきた政治学・歴史学者。

芸術・文化賞

三木 稔
MIKI Minoru
(日本/作曲家)



邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。

芸術・文化賞

蔡 國強
CAI Guo-Qiang
(中国/現代美術家)



北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第16回 2005

大賞

任 東 権
IM Dong-kwon
(韓国/民俗学者)



韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。

学術研究賞

トー・カウ
Thaw Kaung
(ミャンマー/図書館学者)



貴重な貝葉写本の保存と活用にも多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。

芸術・文化賞

ドアンドゥアン・ブンニャウォン
Douangdeuane BOUNYAVONG
(ラオス/織物研究者)



ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。

芸術・文化賞

タシ・ノルブ
Tashi Norbu
(ブータン/伝統音楽家)



ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるバイオニア。

第21回 2010

大賞

黄 秉 冀
HWANG Byung-ki
(韓国/音楽家)



韓国の伝統的楽器「伽倻琴(カヤグム)」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。

学術研究賞

ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT
(米国/政治学者・人類学者)



東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。

学術研究賞

毛里 和子
MORI Kazuko
(日本/現代中国研究者)



アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。

芸術・文化賞

オン・ケンセン
ONG Keng Sen
(シンガポール/舞台芸術家)



現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第17回 2006

大賞

莫 言
MO Yan
(中国/作家)



現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル賞受賞。

学術研究賞

シャグダリン・ピラ
Shagdaryn BIRA
(モンゴル/歴史学者)



世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。

学術研究賞

濱下 武志
HAMASHITA Takeshi
(日本/歴史学者)



アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。

芸術・文化賞

アクシム・ムフティ
Uxi MUFTI
(パキスタン/民俗文化保存専門家)



「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。

第22回 2011

大賞

アン・チュリアン
ANG Choulean
(カンボジア/民族学者・クメール研究者)



「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明。さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みをつつたカンボジアを代表する民族学者。

学術研究賞

趙 東 一
CHO Dong-il
(韓国/文学者)



主著「韓国文学通史」全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及ぶ。韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。

芸術・文化賞

ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW
(ドイツ/建築家・修復建築家)



南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を学際的研究から高次の哲学的営為として昇華させ先導してきた建築家・修復建築家。

第18回 2007

大賞

アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY
(インド/社会・文明評論家)



臨床心理学と社会学を統合させた独自の的方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。

学術研究賞

シーサク・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA
(タイ/人類学・考古学者)



関係諸学を統合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。

芸術・文化賞

朱 銘
JU Ming
(台湾/彫刻家)



深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求め創造へのエネルギーをあわせつつ、彫刻の巨匠。

芸術・文化賞

金 徳 洙
KIM Duk-soo
(韓国/伝統芸能家)



「サムルノリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統芸能家。

第23回 2012

大賞

ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA
(インド/環境哲学者)



開発やグローバリゼーションをもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきた環境哲学者。

学術研究賞

チャーニット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI
(タイ/歴史学者)



アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行う東南アジアを代表する歴史学者。

芸術・文化賞

キドラット・タヒミック
Kidlat TAHIMIK
(フィリピン/映画作家・アーティスト・文化観察者)



途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。

芸術・文化賞

クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono
(インドネシア/宮廷舞踊家)



幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第19回 2008

大賞

アン・ホイ
Ann HUI
(香港/映画監督)



幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のバイオニア。

学術研究賞

サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE
(スリランカ/法学者)



南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績を挙げ、高等教育の改革にも尽力した法学者。

学術研究賞

シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin
(マレーシア/社会人類学者)



民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにいて一貫してリードする社会人類学者。

芸術・文化賞

フォリダ・パルビーン
Farida Parveen
(バングラデシュ/音楽家)



バングラデシュの伝統的な宗教歌謡「パウル・ソング」の芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。

第24回 2013

大賞

中村 哲
NAKAMURA Tetsu
(日本/医師)



パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続け、異文化の理解と尊重を求める国際協力を実践。

学術研究賞

テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI
(オーストラリア/アジア地域研究者)



民族や国家の境界を越え、新しい地域協力や市民社会の在り方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に多大な貢献を為しているアジア地域研究者。

芸術・文化賞

ナリニ・マラニ
Nalini MALANI
(インド/アーティスト)



映像や絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、世界が直面する今日的かつ普遍的なテーマに挑み続ける美術家。

芸術・文化賞

アピチャットポン・ウィーラセタクン
Apichatpong WEERASETHAKUL
(タイ/映画作家、アーティスト)



民話や伝説の中に個人の記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像手法で世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている気鋭の映画作家。

●は故人

●は故人